

大正四年十一月二日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

年十月二日

内閣總理大臣

賞勳局總裁宛

申 牒

従四位勲四等馬屋原二郎ハ夙ニ尊王ノ志厚
ク常ニ文武ノ道ヲ修メ皇室ノ式微ヲ痛嘆シ王
政復古ニ非サレハ天下ノ政權ヲ統一スル能ハサ

三十

内閣

ルモノトシ兵制改革ニ從事シ同志ヲ糾合シ大
但隊後干ヲ編制シ小隊司令士トナリ又御
指隊後志ヲ編制シ小隊又中隊司令士ト
ナリ爾來外國艦隊ノ襲來内國ノ擾乱
ノ事ニ参加シ其間苦心慘怛或ハ身ヲ他
藩ニ寄セ尊王ノ大義ヲ旨トシ終始一貫
其方針ヲ誤ラス維新ノ後外國ニ留學シ
明治八年司法省七等出仕ニ出身シ尋
テ判事ニ任セラレ三十年退職三十六
年貴族院議員ニ任セラレ今日ニ至ル

34

者ナリ要スルニ維新前ノ行動ハ藩主ニ
忠ニ即シ盡スト同時ニ王政復古ノ志
業ニ鞅掌セシモノニシテ就中甲子京師
ニ於ケル變乱ノ際木戸孝允ト共ニ生
死ノ間ニ奔走シ國事ニ盡瘁スルコト
斷カラス後備後福山城ノ攻撃ノ際ニ
テハ其城門ヲ破リ突進遂ニ城兵ヲ降
服セシメタルハ即ケテ皇軍ノ武威ヲ
後揮シ施テ沿道諸藩ノ帰順ヲ速
決セシメ以テ王師ニ反抗スルノ餘地
ナカラスナル等其功績最モ顯著ナル
者ニ候處夫人ハ目下病氣危篤ノ趣
ニ付前功ヲ録セラレ特ニ勲三等旭日
章ヲ授與ノ詔儀相成ニ及

内

閣

推薦書

236

貴族院議員 判事 從四位勳等馬屋原二郎

本人儀ハ夙ニ尊王憂國ノ志厚ク常ニ文武ノ道ヲ修
ノ皇室ノ式微ヲ痛嘆シ王政復古ニ非サレハ天下
ノ政權ヲ統一スル能ハサルモノトシ兵制改革ニ從
事シ年少ニシテ鼓正役トナリ又世祿士族ノ士氣ヲ
作興センタメ同志ヲ糾合シ大組隊ヲ編制シ小
隊司令士トナリ又御指隊ヲ編制シ小隊又ハ中
隊ノ司令士トナリ馬關及ビ三田尾等諸所ニ屯營ス
爾來外國艦隊ノ襲來馬關内國長ノ擾乱京師甲子ノ事
變四境長ノ戦争乃ニ福山城備ノ攻撃等各地ノ戦争
ニ参加セサルナシ其間崎嶇間、或ハ身ヲ他藩ニ寄

セ或ハ天王寺、嵯峨、天龍寺ニ於ル本營ノ軍議ニ參與
臥是レ皆尊王ノ大義ヲ旨トシ終始一貫其方針ヲ誤
ラス維新ノ後明治外國ニ留學シ同八年歸朝同年八
月初ニ仕官司法省七等出仕ニ任シ尋ニ判事ニ任セ
ラル爾後二十三年間同省ニ奉職シ多クハ開港場々
ル函館、神戸及ビ大阪ノ地方裁判所長タリ同三十年
退職同三十六年貴族院議員ニ任セラレ今日ニ至レ
ル西ノナリ要スルニ本人力維新前ニ為シタル行動
ハ藩主ニ忠節ヲ盡スト同時ニ王政復古ノ志業ニ執
掌セシモノニシテ就中甲子京師ニ於ル変乱ノ際木
戸孝允ト生死ノ間ニ奔走シタルハ其自書木戸氏ノ
辭ニ依リ本人力平素國事ニ貢獻スルノ一端ヲ見ル

〇
ニ足ル又維新ノ際備後福山城ノ攻撃タルヤ其城門
ヲ破リ突進攻撃遂ニ城兵ヲシテ降服ニ至ラシメ即
チ此ノ一撃ハ 皇軍ノ武威ヲ發揮シ援^施テ沿道諸藩
ノ歸順ヲ速決セシメ以テ玉師ニ反抗スルノ餘地ナ
カラシメタルハ本人ノ功績最モ顯著ナリトス

明治四十四年七月

本書、澤田、上、桂、公、爵、府、正、爲、文、ト、ナ
其、以、助、道、達、セ、リ、ト、同、公、爵、府、正、爲、文、ト、演
セ、ラ、レ、ル、モ、也